

発表：モンゴル日本語教育スタンダード作成プロジェクト 全体概要

浮田久美子（ウランバートル市教育局）



<資料の補足>

モンゴル日本語教育スタンダードの目標

- ・プロジェクト始動にあたって、まず初中等教育修了時点での目標を決めた。

スタンダード実施校

- ・ウランバートルではスタンダード授業実施（教材作成）を3つのチームに分けた。
これは、それぞれの学校で日本語学習を開始する学年が異なることに配慮したため。
 - A チーム：初等前半から学習を開始し、ひらがな・カタカナ既習の状態でスタンダード準拠授業に入る学校。ここで作成する教材を、モンゴルの共通教科書の土台にすることを目標にしている。
 - B チーム：モンゲニ学校の中・高学年。中西先生が独自教材を作成。
 - C チーム：初等後半または中等前半から日本語学習を始める学校。牧先生が中心となって教材を作成。

ウブスハンガイ県：メルゲト学校の2学年で実施。

教材作成の流れ（A チーム）

- ・まず、勉強会で Can-do ステートメントを考え、教育大学の先生と片桐先生で Can-do リストを作成した。（別添資料…4年生の1年間のトピックと Can-do リスト）
- ・学校によって授業数が異なるため、リストは一番授業数が多い学校に合わせて作成。
- ・実際に学校で教えている各教師が分けて教材を作成。浮田さんがそれを修正し、片桐先生の確認・フィードバックを受け、再度修正を行い、教材が完成する。ゼロから考えるため非常に時間がかかり、教材を作りながら授業をするような状態。
- ・一つの Can-do（教材）に対し、40分×2コマ（4ページ）の所要時間が基本。
- ・トピックは学習が進むにつれ（学習者の成長に合わせて）徐々に広がり、増えていくスパイラルになっている。（別添資料…4-6年生の Can-do リスト比較）

教材

特徴

- ・まず、状況説明がある。（例「日本人の先生が学校を訪問」「日本の学校を訪問」等。）
これで、日本語を使わなければならない状況にあることを理解する。

- ・最初にトピックや Can-do に関する絵がある。その絵を見てその日の学習内容をイメージしてもらう。
- ・それからその日の Can-do について説明し、学習目標を提示する。Can-do についてはモンゴル語も入れる。
- ・語彙は CD を使い、耳から導入する。学習者に合わせた語彙を心がけている。
- ・その後「きいてこたえましょう」で、まず聴解問題をする。その後「かんがえましょう」で初めて文法問題を行うが、教師が最初に文法説明を行うのではなく、まず学習者が自分で考えて、答え合わせの時に初めて教師が説明する。
- ・再度聴解問題を行って理解を確かなものにした後、アウトプットに移る。「はなしましょう」で会話の代入練習を行い、その運用として「ともだちにききましょう」で友達と聞きあう。
- ・「ふりかえりましょう」では、その授業で行ったことをもう一度振り返って書いてみる。普通体で話す会話授業のときでも、書くときは丁寧体を使うよう指導する。
- ・最後に Can-do に対する自己評価を行う。学習者が学習目標を理解し達成できたかどうか自分で判断する。その「できた」という気持ちから、更なる学習意欲を引き出すことができる。

